

平成30年度 第1回松島町総合教育会議

日 時：平成30年8月6日（月曜日）
午前10時00分から午前11時18分まで

場 所：松島町役場 2階 201会議室

松島町

平成30年度 第1回松島町総合教育会議録

招集月日 平成30年8月6日（月曜日）

招集場所 松島町役場2階 201会議室

出席者	松島町長	櫻井公一
	教育長	内海俊行
	教育長職務代理者	瀬野尾千恵
	委員	鈴木康夫
	委員	佐藤実
	委員	赤間里香

事務局	教育次長	三浦敏
	教育課長	赤間隆之
	教育課学校教育班長	大宮司綾
	教育課学校教育班主査	佐藤弘也
	総務課長	千葉繁雄
	総務課総務管理班長	櫻井和也
	総務課総務管理班主査	大久保哲也

会議日程

1. 開会 平成30年8月6日（月曜日）午前10時00分 開会（録音開始）
 2. 挨拶
 3. 議題
 - (1) 松島町における英語教育の取組みについて（英語教育が楽しい町へ）
 4. 閉会 午前11時18分 閉会（録音終了）
-

1. 開会

○櫻井班長

定刻前ではございますが、ただいまから松島町総合教育会議を開会いたします。
まず初めに、櫻井町長よりご挨拶を申し上げます。

2. 挨拶

○櫻井町長

改めまして皆さんおはようございます。
大変皆さんお忙しい中、週の初めというのにご参集していただきまして、ありがとうございます。
そして、足元の悪い中、本当にありがとうございます。
本日は松島町総合教育会議の中で、教育委員会の皆様には日ごろからの教育行政に対しての今日話題ということで、松島町がこれから取り上げようとしている話題についてご審議を賜りたいというふうに思っております。
本日の議題でありますけれども、松島町における英語教育の取り組みについてということで、楽しい英語ということで、そして楽しい英語で松島町が、ひとつ子供たちがまた一段とパワーアップできるようにということであります。
今日は皆様方から忌憚のないご意見をいただいて実りある教育総合会議にしていきたいと、このように思いますので、今後ともよろしくごお願い申し上げます。
本日は最後までよろしくごお願いいたします。

3. 議題

(1) 松島町における英語教育の取組みについて（英語教育が楽しい町へ）

○櫻井班長

それでは、これより議題のほうの進行は内海教育長お願いします。

○内海教育長

それでは、私のほうで進行させていただきます。
大体、お話す時間は1時間半弱程度と考えておりますので、よろしくお願いします。
資料は4つ用意しました。ゼロからお話するのでは大変かと思ひまして、この資料を基にあご意見をいただきながら話を進めていきたいと思ひます。
資料4枚について、教育委員会の教育次長の三浦のほうからポイントを押さえながら説明させていただきますので、既にわたっていると思ひますので、ご覧になりながら聞いていただければと思ひます。

それでは、よろしくお願いします。

○三浦教育次長

よろしくお願いいたします。

では、私のほうからは、資料に基づきまして、英語の改革等も含めまして簡単にご説明申し上げます。

まず資料の1でございますが、カラーの横刷りになっております。これは文部科学省の教育課程部会という部会で平成29年11月に出された資料でございます。これは平成33年度から新しい学習指導要領で小学校もスタートします。これからの大学までを見据えた英語教育をどうしようかというビジョンが示されています。

御存じのように、英語教育がなぜこの改革になったのかということをご簡単に申し上げます。

急速なグローバル化の進展でやはり異文化理解、今異文化のコミュニケーションが必要となってくるということが言われています。東京オリンピック・パラリンピックが2020年にあるわけなんです、今学校で学んでいる児童生徒が卒業後、社会で活躍する時代、文科省では2050年というような言い方もしているようですが、2050年ころには、いわゆる今の小学生が社会の中で活躍する年代のころには日本はもう多文化、多言語、多民族が協調するあるいは共存する環境の中にいるんだろうと。だからこそグローバル化が進展する今、将来を見据えた英語教育というのが重要になってきているということから、今回の改訂が行われています。

資料をご覧ください。左側が現状、そして右側の大きくとっている部分が新たな外国語教育ということにしております。

小学校につきましては、5、6年生の活動型の外国語活動ということでしたが、新学習指導要領では3、4年生に新たに活動型として、これまでの5、6年生で教えていたもの。そして5、6年生は教科型ということで、読むこと、書くことを加えるという中身になっています。

今回は学習指導要領では一番上に、1行目のところに、何ができるようになるかという観点が見えています。例えば小学校では、話すことは、具体的に申し上げます。例えば、自分や相手のこと及び身の回りのものに関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり、質問に答えたりして伝え合うことができるようにするというようなものを目標としております。つまり、小学生でもある程度のコミュニケーション力をつけるという目標が見えています。それに伴って語彙力、右側にありますように小学校では600から700語程度の単語も身につけましょと、できることとして入れましょという画期的な内容になっています。

中学校につきましては、字数が変わらない、これまで週4時間、各学年週4時間で変わらないんですけども、変わらない中で、左側の現行1200程度の言葉はもう1600から1800というふうに大きくなります。あるいはやはり対話的な活動を重視だということで、より話す力が重要になってきているということです。中学生では、具体的に話すことのやりとり、もう社会的な話題に関して、聞いたり読んだりしたことについてももう自分の考えたことや感じたこと、そして理由を含めて、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができるようになるというような目標を掲げています。高いレベルでやりとりができるようにするという目標を掲げています。

今、左側に戻りますと、現状、英検という指標がございますが、英語検定、中学校では3級程度というのが目標として示されています。ただ現状として、国では36.1%と、目標は50%なんです。宮城県はさらに低くなっています。その中で、県教委の教育長もとにかく目標を、50%にしたいんだという目標を掲げております。そのような、高校では英検準2級程度という

目標を掲げているということです。これは国際基準、CEFRというものに基づいて設定をしているところになります。

2ページ目のものは、現在の英語検定の各級になっています。1番の中学1年生とかは今まで初めて受けていたのが英検5級と、卒業するまでに3級をとりましょうということです。中学校なんかでは、年間2回英検を実施しておりますが、去年は3級が13名合格で、あと準2級が1名合格、あと高校卒業程度、2級も1名合格しております。年間の合格者はそのようになっているということで、優秀な生徒もおります。

資料に戻りますと、大学中級程度というものが準2級というようなものということです。英検が、英語検定はです。そのほか、御存じかと思いますが、TOEICみたいな英語検定もございます。

資料の2をご覧ください。

これは、本年度の各行政区の懇談会でも使わせていただいたものです。現在の外国語指導助手、平成29年度から2名体制にして手厚く指導しているということで、地域の方々、区長さん等にご説明を申し上げたものです。現在は、ブライアン先生が中学校をほぼ中心的にやっています。あと、マーティン先生が小学校の3校に行って外国語活動の指導助手をしているというようなところですよ。

現在移行期間、左側にありますとおり、32年度完全実施でございますので、今年と来年につきましては移行期間ということで、時数は少し抑えられております。ですから、32年度完全実施になった後はマーティン先生の時数もちよっと増えてくるのかということになります。

あと、現在なお県の非常勤講師、週12時間、県から配置をいただいております。これは県内でも30人しか配置されていないということで、なかなか県内でも人は多くないということで、今年配置されていますが、来年度以降も確実に配置されるかどうかというのはまだ不透明というところがございます。ちなみに、県の非常勤講師は瀬野尾先生になっていただいているということでございます。週12時間、一小と二小ということでございます。

資料の3ページでございます。

これは、今現在教育委員会で考えているものということでの素案というふうにとっていただければというふうに思います。

1番は、教科化に向けた取り組みということで、既に現在子供の、幼児、3歳児あるいは保育所にも行っているわけなんですけど、幼児から中学校3年生まで切れ目なくALTなんかとかかわりを持ちながら英語遊び、あるいは英語活動ということでかかわっていくと。現在は教育課程にはない小学校の1、2年生についても年間数回指導場面というか、英語に触れる場面をもっているところですよ。なお、幼稚園だけではなくて保育所にもALTが行って活動しております。

成果としては、幼稚園の子供たちも自然に英語の単語が出てると、何かご飯を食べながら「Do you like……」というような疑問詞を出したりとかしているということを聞いております。

2番については、先ほど申し上げたとおりでございます。

3番について、これからどのようなことが考えられるかということで、近隣の市町村等でも実践されているような中身もありますが、例えば夏休みの英語漬けのキャンプ、例えば宿泊を伴ってというものの、あるいは放課後の時間に英語に触れる時間を設けたり、あるいは現在行っ

ている子供英語ガイドというものの連携をさらに深くしたり、あるいは昨年度も話題になりましたけれども、コミュニティースクール等も活用しながら、町内の英語の力をお持ちの方に協力をいただいて子供たちのためにボランティアなどを公募しながら活用させていただくような形。あとは、教員の指導力というのも、やはり小学校の教諭、特に本町においては英語の免許を持っている教諭は2人しかいません。ただ、2級免許だったりします。あと、持っているのは校長、教頭だったりしますので、まだまだ不足しているというところが課題としては上げられます。

町としての願いとしては、観光の町でもあるという切り口が大きいのかと思いますし、先ほど申し上げたグローバル化に対応した子供たち、将来を生き抜く子供たちを育てるためにも英語の力をつけてあげたいという思いがありまして、今回その話題とさせていただきます。よろしく願いいたします。

○内海教育長

ありがとうございます。

一通りお話してもらいました。

ひとつ資料1のほうご覧になって、今までとまったく違う一つの事実として、右側の端に、小学校では600から700程度の単語を覚えましょうとなっております。これは驚くべき数字でもあります。今まで小学校でなんて英語なんか触れたことのない子供たちがこれからは600から700、何らかの形で覚えていくというようなことになっていくということで、ちょっと付け足させていただきました。

一通り、資料の1から3まで次長のほうから説明ありました。

まずは資料を見て疑問に思ったこと等あれば挙手してお話ししていただければと思います。佐藤委員、お願いします。

○佐藤委員

英語の免許証を持っている方が2人というのがありました。それ、小中で2人という……。 (「いや、小学校」の声あり) 小学校が2人っていう意味ですか。(「はい」の声あり)

あともう一点、今次長からお話を、外国語教育のイメージが示されたわけでありましたが、報道でもいろいろとその課題は何ですかっていうときに取り上げられているわけでありましたが、教育委員会としては、課題をいくつか挙げるとすると、どんなことが特に課題だというふうに捉えているようであるのかご質問します。

○内海教育長

次長。

○三浦教育次長

課題としてはさまざまあるんですが、人的なものとして挙げれば、完全実施の平成32年度以降を考えますと、これから時数が倍増するというので、現在の体制でもちょうどギリギリやっているわけなんです。幼稚園、保育所等へもALTを派遣するというのがちょっと難しくなるのかというところで、小学校の時数がふえるものですから、そちらにALTを回すということがちょっと難しくなってくるということで、一つは人的なもの。あるいは県の非常勤講師の、必ず配当されるかどうかという、配置されるかどうかというのがちょっと不安定だと、人的な課題が一つでございます。

もう一点は、先ほど申し上げた教員の力量向上という、やはり苦手意識が小学校の先生には

確かにあります。あとは、多忙化にちょっと拍車をかけてしまう部分もあって、やはり英語の専科の先生を常勤で入れられればいいのかというふうな思いはあるわけなんですけど、そこら辺が課題なのかと思います。まだまだ教員の研修が追いついていないというところは課題なのかと思います。

あとは、本町におきましても、中学校なんかでも標準学力検査等をしているわけなんですけれども、これは英語だけではなくて全ての強化において学力を、指導力を向上した上で学力向上をしていかなければならないという課題はやはりあるのかと。それは英語だけではなくてということで認識はしているところでございます。

○内海教育長

よろしいですか。（「ありがとうございます」の声あり）

人的なものとか、あと免許を有した優秀な教員の人事的な配置ということも課題の一つになっていますという話でございます。

鈴木委員、お願いします。

○鈴木委員

32年度から、全国的にこれは取り組むあれなんですけれども、本町が取り組む上でちょっといろいろ今課題は何だったんですが、他市町村も全部同じような対応を迫られていると思うんですが、調べられる、特筆すべき取り組みとか何かやっておられるところがあったならば、そことの違いとかちょっと教えてもらえるといいかと思えます。

○内海教育長

三浦次長、お願いします。

○三浦教育次長

これなんですけど、河北新報にもつい先月紹介された中身をちょっと引用させていただきますと、近いところで七ヶ浜町は教育施策としてグローバルプロジェクトという、いわゆるグローバルとローカルを掛け合わせた造語ということで、3つの小学校で、小学校で特に英語コミュニケーションという文科省の特例校の指定を受けて実施しているということで、ALTの活用、あるいは夏休みに国際村で宿泊を伴った英語キャンプなんかの展開をしているというところで

あとは、県内では蔵王町がざおう英語活動という、これも独自の教育活動をしております。英語の専科の教員を町で配置して、あるいはALTも増員しながら取り組んでいるということです。今度オリンピック・パラリンピックに向けて、パラオのホストタウンであるということで、そういう受け入れも含めながらということで取り組んでいるようです。

あと、白石市については、白石高校という地元の県立高校と連携しながら英語力の向上ということで取り組んでいると。相互の授業改善の研修会とか、あと授業参観を実施しているというような取り組みもあります。

あと、新聞記事には載っていなかったんですが、色麻町なんかでも独自の英語教育、もう教育課程が始まる前から小学生に英語授業を取り入れるということをやっています。

あとは、やはりなかなか今移行期間、今年と来年移行機関なんですけど、指導に苦慮しているという市町村の声もよく聞くとこです。先ほど30人の英語専科が県で配置されたといいますが、配置されていない自治体にとっては、担任が文科省に配付された資料やDVDなんかで指導しているわけなんですけど、何かこう苦慮しているという話も伝え聞いています。

○内海教育長

鈴木委員、よろしいでしょうか。（「はい」の声あり）

七ヶ浜については、ちょっと補足させていただきますけれども、文科省の特区という認定を受けまして、今までのカリキュラムと従来のカリキュラムを超えた中での英語教育が可能なので、普通の町立学校とはまた違うやり方だというふうになってきます。蔵王町、白石、色麻、今説明した、こちら辺は普通の町立学校でやれる範囲なんではないかという気がいたします。

それから、三浦次長からもお話があったように、県の非常勤講師、これがいただいている。それから、この町にはALTが2名いるということで、他市町村以上に人的な配置、別な意味で、先ほど出たやつとちょっと違うんですが、人的な配置は優遇されているということになっています。（「併せていいですか」の声あり）はい、じゃあお願いします。

○鈴木委員

そうすると、今からの本町での取り組みですが、ALTそれから県の瀬野尾先生、非常勤の方ということで力をつけていくという施策を積極的に取り組んでいきたいということですか。

例えば、独自の何か予算的なもの、地域でということ想定されているのか。それとも従来、今やっている取り組みを確実に、効果的に上げていくというようなことをご計画になっているのか、その今の計画をちょっと、今までの延長線なのか、そこのところをちょっと。

○内海教育長

それでは、先ほどのやつも踏まえながら、次長のほうから説明してください。

○三浦教育次長

先ほどご説明した中にもあったんですが、平成32年度から、例えば小学校でいいますと全部3年生から6年生までのトータルの時間を合計しますと、週に24時間になります。現在は週15時間というところで、瀬野尾先生には週12時間ご協力をいただいているところなんですけど、ほぼカバーできているところなんですけれども、週24時間ということになりますので、ALTも1週間に29コマしかないということで、24コマということが非常にちょっと過酷であるというような、事前の準備あるいは教員との打ち合わせというのが足りなくなってくるわけなんです。ですから、1人で賄うのがちょっと厳しいだろうというところで、そこら辺の人的配置についてはこれからちょっと考えながらということになるのかと思います。人が多いには越したことはないわけなんですけれども、その人的な配置についてはやはり検討課題なのかというふうの一つ思っております。現在の移行期間でも取り組んでいることを持続するためにも、もう既に完全実施では人が足りなくなるということですので、そこは一つ大きなところであります。

それを土台にしながら、先ほど一番最後の資料3で申し上げた、こういう人的なものが配慮できれば、先ほど申し上げた枠組みのところ、赤い枠の3番のところですか、こういうことも展開できていくのかというところは考えております。

もちろん幼児教育等の英語教育というのもこれまでやっていましたけれども、英語が小学校で完全実施になりましたからもう人が行けませんので、幼稚園さんと保育所さんはもう全くゼロになりますというのも、これまで進めてきた流れを切ってしまうところがあるので、そこはちょっと避けたいというふう、今後も何か考えていきたいと思っております。

○内海教育長

鈴木先生、よろしいですか。

○鈴木委員

これ結構大変ですよ。そして効果的な成果を上げていきたい、上げていかなきゃならない。そうすると、やはり具体的な戦略を作らなくてはならないですよ。そこのところを取り組まなければならないですよ。

○三浦教育次長

そうですね。人を増やせばそれで終わりというわけではないので、町が人を増やした上で何に取り組むか、どう取り組むかというのが重要になります。

○内海教育長

もちろん、そして人を増やせば結果を伴わなければならないので、結果が費用対効果っていう形で、やはり子供たちが伸びた、変わったっていうような形に落としていかないと、付けてもらうだけではこれは話にならないので。

○鈴木委員

これって私いつも常日頃思うんですけれども、こういうのって効果って何で見るかっていうと、取り組む以上こういうふう目標、さっきのTOEICとか英検のやつあったんですけれども、やはり目標というの欲しいし、そうじゃないと評価のしようがないし。あるいは、夢を言えばきりがありません。例えば、私思うんですけども、

本当は、ちょっと極論なんですけれども、先ほど2つ、グローバルと観光とおっしゃった。もう一つは国がやっている。グローバル、観光、観光だったら私中国語をやれと。すごい、今中国語をやっているところがあって、中国語と英語でって、小中。真剣に、ちょっと本当に効果的な、どういうところに向かっていくか。さっき七ヶ浜は特区だっておっしゃった。七ヶ浜すばらしいですね、先見の明があるんですかね。取り組みが活発ですよ。やはり何か目標をしっかりと掲げて、やはり絶対グローバルと、やはり観光客、今からいろいろな方、そこをしっかりと対応していくにはどうしたらいいかということベースに、そこで教育ってどうあるべきか。戦略的にやはりロードマップも作りながら、毎年そのロードマップを変えていくというような取り組みがあってもいいような気がしてならないという感想です。

○内海教育長

ありがとうございます。大変ありがたい示唆をいただき、学びのロードマップとか戦略的にどうしていくか、結果をどう捉えていくか。表情が変わったとかそんな感じではなくて、数値的なやつということで、それをこれから考えていきたいです。

ほかにございませんか。瀬野尾先生、お願いします。

○瀬野尾委員

よろしいですか。

実は4月から学校のほうに入りまして、それまでも中学校では放課後学習支援等で子供たちの英語の力っていうのを大体肌では感じてきたんですが、学校に入りましていろいろなことを、具体的にメリットやデメリット、これから考えていかなければならないことを肌で感じております。

松島でALTを2人採用しているということで、幼稚園とか低学年の子供たちが外国人に接したときに、私たちは子供のころとてもほかの人種のように全然声もかけられない、むしろ逃げたり遠巻きにしたりしていたんですが、本当に腕につかまったりいろいろして遊びますよね。ああいうところはやはり効果としてあるんだろうと思います。

それから、あと中学年ですが、今年から、私3年からかかわっているんですが、3、4年生は

もうどこで会っても「瀬野尾先生だ、How are you?」とかっていう感じなんです。私を見ると「How are you?」って聞く、そんな感じで、中学年の子は英語というものを楽しんでいるんだということを感じます。ただ、高学年になると苦手意識が出てくるんです。そこら辺のところは今回の教育課程の、32年度から完全実施で出ている、読むこと、書くことが新たに入ってきた原因なんだろうと思うんです。中学校へ行って、特別、特に書いたり読んだりするときになると、たとえば「open」という単語があったときに、「オープン」と読めないんです、やはり。A、B、Cというアルファベットは一つ一つ読めたとしても、例えば「apple」にしても、英語の文字と発音の文字とがどうしても一致しなくて、ものすごく読むのに1年生の子は難儀しているんです。それがまず教科書から離れる一つの原因なんだと。そういう意味では、今度の新学習指導要領ではそこを埋めるカリキュラムが入っておりますので、いろいろ今までの課題を捉えて作られているんだということを感じております。

先ほどの鈴木先生と次長との話につながっていきますと、そういう意味で、今松島で使っている教育課程は、私もそうですが、突然のことでしたので、指導書をもっぱら頼って始めました。でも、この夏休みに入って、もう一度学習指導要領に、本当にそういうことを必要としているのか点検したんです。読んで合わせますと、やはり学習指導要領は少し先行して、またはこちらの受け止めかもしれませんが、先行している部分があると。普通の授業ではここまで要求しなくて良かったんだということを感じています。そういう意味でもう一度、もう一度というよりも、松島が本当に英語に力を入れるのであれば、幼稚園からのカリキュラムを、やはり大雑把じゃなく、一つの1学年においても、前半の目標はここまで、後半はここまでっていうシラバスをずっとこう作って、それに沿って指導していかなければならないとなれば、まずこの移行期間に実施に当たってのそれを作るという作業があると思うんです。

そのところを現状で今どのくらいできるかといいますと、せっかく中学の英語の鈴木先生が小中とのスムーズな連携をできればしたいという意向があると聞いていたんですが、この間私がほかのことで仙台に出張したときだったので見られなかったんですが、小学校で4年生を使って授業をしたときに、全く指導書ともかけ離れたところをしたものですから、先生あれは今4年生あの教科書は使っていないし、あそこところはちょっと流れとしてつながらないんですって言いましたら、いいんです、あれはあれとして単発でしたので、やっていようとやっついてまいとあれはあれでいいんですっていう話だったので、ちょっとこれじゃまずいと思ひまして、やはり小中との話し合いが必要だと感じています。

小中と、本当にこれは校長以下ちゃんと理解していただいて、今6年生で私が、移行期間で来年中学校に行っても困らないようにという範囲で教えていることが、じゃあ来年中学校で、意向として何をしようとしているのか。そのためには小学校の出口をどこにしないといけないのか。そういう話も今のところちょっと残念ながらできていないんです。だから、今できることといえば、今いる人の中でとにかく、完全でないといえども、見えるようなそういう段階的な道筋を作る必要があるだろうと一つ思っております。

話が長くなるんですが、そういうまずところです。

○内海教育長

前から松島町の教育委員会は12年教育だということで、瀬野尾先生も意識してお話していただいたんですが、カリキュラム、縦のカリキュラムについてご意見いただきました。そして、小学校では何ができるのかと。できたものを中学校はきちんと受け取れるかということの話か

と思います。

三浦次長、コメントを。

○三浦教育次長

これまで幼稚園、保育所につきましては、特にALTに任せていたんです。我々も中身については任せていましたので、そういう小学校3年生からの外国語活動にスムーズに入るという意味では連続性といいますか、じゃあ文科省が言っているように幼児期に何ができるのであるのかということ、町で独自に明確にして、ALTがそれに基づいて指導していくっていう、9年間プラス幼児期の3年間の流れというのは非常に大事にしなければならないというふうに、今お話をいただいて考えたところです。

○内海教育長

また、そのほかに、ALTだけではないですね。学校の先生方についてもです。

○瀬野尾委員

そうですね。そこについて、よろしいですか。

国としては、小学校教諭がこれから英語のカリキュラムでも教員養成課程の中に入れて、英語もできるようにするという方針ですよ。違うんですか。そこがどうも。いわゆる担当が英語をやっていくようにも受け取れるし、一方では、この間の行政説明においても、来年も英語専科は置くけれども、全国で2,000とか3,000とかって言っていました。

そんな中ですので、両建てでやっていく感じかもしれませんが、私の感触では、今教員の働き方改革といわれている中で、今でさえ次の日の授業の指導計画、授業計画を立てるのに、私の、自分の実際の経験では、3教科がせいぜいでした。明日の子供たちの授業をちゃんと準備するには、そこへ英語が入ってきたら、これは大変だろうと思います。ですから、私はできることなら専科制をとっていった方がいいと思います。

もし先生が、担当が自分の勉強のためにも入りたいていうなら、どうしても小グループの中で会話をやるときには、やはり小グループ化が必要なんです。マーティン先生やブライアン先生とゲームをすると、教室は湧き上がるんです。わって、もういかにも楽しそうになって何となく自己満足するんですが、じゃあ1対1で会話してみましようっていうと、もう声が出ないんです。あんなにみんな「Do you like 何か……」ってやっていたのに、じゃあ言ってごらんっていうと、何だっけとかってなるんです。だから、やはり本当の意味で自分が、「Do you like……」にしても、使いこなすには小規模の中でみんな何度か何回も言い合う活動が必要なので、そこへ担当が入ってくる分には大いにいいことだと思うんですが、指導計画とかその処理なども全部担当がっていうことはちょっと現実的に難しいだろうと思いますので、先ほどの次長がお話していた人的な問題は、全面実施になったときにはどうしても考えなければならないと思います。

○内海教育長

ありがとうございます。

人事については私の範囲になってくるんだとは思いますが、専科制が、フリーで英語の専科でやれるかどうかちょっとあと確認したいと思いますが、一つとして、今教員採用で、英語枠で採用していると、宮城県は。ですから、英語の専門性を持った教員がこれからたくさん採用される、そういう人たちを松島に迎え入れるというような形も可能なのかと。ただ、英語を持った人が優れた教員だとは限らないんですけど、ただ一つの方策として、学担に過

度の負担がかからないように、英語のスペシャリストがいれば非常に楽だと思っております。

それから、先ほど次長が説明した中で、民間というか町民の方で英語ができる方の公募をしていきたいと。これはちょっと来年の、どのような対応、お金もかかるかもしれませんが、保険とかそういうのは、あとはちょっと町長とやりとりしないといけないんですが、そういうような形で、英語のサポーターみたいな形があれば非常に学校としてはありがたいんじゃないかなんて思っているところでございます。

ちょっと付け足ささせていただきました。

あと、赤間委員、何かございませんか。

○赤間委員

一番最初に次長のほうから課題の部分のお話が合った部分で、人的な部分は今までの瀬野尾先生だったり鈴木先生のほうからお話がありましたけれども、力量の部分、どうやって先生方の力を上げていくのか、そういったところ。専科にしてしまえば多分そこまで必要はないんでしょうけれども、32年度に完全実施になったときに、専科ができない、担任の先生が全部やらなければいけないとなったときに、そこからじゃあいろいろやりましょうといっても全然間に合わないわけですよ。

今指導力向上プロジェクトとかやられていらっしゃるけれども、これを、英語に特化したものを今後やる予定なのか、そういったところもちょうと質問させていただきたいところはあるんですが、今町内で2人しか英語の免許をお持ちの小学校の先生がいらっしゃるという中で、実際どの程度やっていけるのか。これから小学校の先生で英語の免許もお持ちの方を、先ほど教育長から松島に招き入れたいというお話がありましたけれども、そういう方々に本来に来てもらえるような町にしていけないと、多分来てくださって言って、松島に行きたいっていう、そういう先生がたくさん出るぐらいの教育の現場を作っていけないと、多分それはほかの市町村にとられちゃう、いい先生が松島に来ないっていうようなことを考えていかなければいけないと思うんです。

そうなったときに、今教育っていったら何か学校に頼りきりという部分が多少あるかと思うんです。特に英語になると、家庭で果たしてお父さん、お母さんたちが英語の勉強を、子供たちの英語の勉強を見られるかっていうと、見られないわけです。地域を挙げてというか、松島町を挙げて本当に町民全部で英語って向かうような流れを作らないと、学校の先生にばかり負担がかかって、子供たちは学校では英語を勉強してきますと。家に帰ってちょっとした会話をお母さん、お父さん相手にしようと思っても、お父さん、お母さんが相手にならないといったら何にもならないわけです。そういったところもやはり町ぐるみというか、学校任せじゃなくて町ぐるみで英語をどうやっていくかっていうのをぜひ考える流れを作っていただいた方がいいのかって。どうでしょう、瀬野尾先生。（「いえ……」の声あり）

○内海教育長

「ローマは一日にして成らず」ということなんで、いきなりそこは……。

私もそのような考えは持っているんですけれども、資料3の3に書いてありますように、英語漬けキャンプで町民の方々に理解してもらったり、あと学び支援教室、これどうなるかわかりませんが、放課後英語教室みたいなのをやって町民の認知度を高めていったり、そういう形で少し松島、英語についてはちょっと、本気というとおかしいんですけれども、他市町村と違ってやる気があるんだというようなことをだんだんわかっていたらいいようにしていきたい

いと思っております。そのための、3番目は1から5、考えられる部分を挙げたところでございます。議長の私が言うのもあれなんです。

それで、一つ力量アップのために、小中連携した指定校というものがありますので、英語に特化した指定を研究していくってというような形でもっていくっていうのも可能で、それは私の頭にも入っておりますし、そうすると瀬野尾先生がおっしゃった小学校の出口と中学校の入り口辺りについての学力の橋渡しといいますか、そういうものもきちんとできてくるのではないかと思っておりますが、こちら辺については、今お話があったように町民挙げてというまではちょっとあれなんですけれども、今のところはそんな形で少しずつ実績を積んでいってやっていきたいと思っております。

佐藤先生。

○佐藤委員

今の英語教育っていうときに、英語活動というのと小学校5、6年の英語学習っていいですか、それって分けて考えないといけないんじゃないかって思っているんです。

実は、英語活動というのは平成23年から各小学校に実施をしなくちゃいけないというふうに5、6年生はなっていて、先生方は、既に英語活動の指導法というのは身に着けているというアンケートもできているんです、英語活動そのものは。

ただ、ここで問題なのは、今心配されているのは、英語の教科化っていうところの指導をどうするんですかっていうときに、やはり小学校の先生方が不安に思っているところなんだろうというふうに思っております。

実は、自分の話をするのはあれなんです、宮城県で平成9年から平成11年まで、私塩釜二小にいたときに、研究開発校とって、20年前にこの研究開発をしたんです。宮城県で2校でした。小学校が気仙沼、それは小規模校で、ちょっと都市部から離れたところなんです。もう一つは都市部に近く、仙台という都市も近くて、大規模校っていう、4、5クラスだったんです。そこに指定校が来た。だから、小規模校と大規模校でどういうふうに英語活動がこれからできるんですかっていう指定だったんです。それ、もう20年前からその英語活動っていうのは、文科省から指定を受けて全国で研究されてきたんです。20年間なんです、今年でもう既に。私も3年間これに関わりましたけれども、その英語活動というのはまさに今、今度3、4年生でやる、小学校ですって23年からやってきているそのものなんです。ですから、それっていうのはもう下地があって、20年から10年間、完全にやりなさいって言われたのは23年ですから、それぐらいの下地があるわけですし、だから先生方の腹構えの中には当然カリキュラムも全国的に、塩釜二小のカリキュラムっていうのは全国に流れたんですけれども、そういうことで、どこでも意外とそういうものは流布していたと。

問題はこの英語活動の、すなわち今までは英語活動というのはコミュニケーションの素地を作るというわけです。ところが今度は、小学校5、6年生は基礎を作るっていうわけですね。この基礎を作るっていうのと、中学校でもコミュニケーションの基礎を作るっていう、この表現がほとんど同じなんです、小学校の5、6年生と中学校は。そこのところをどうするんですかというのが小学校の先生方の大きな悩みなんだろうって私は思っているわけです。そこに専科の話なのか、だからこそ専科の話が出てきたのかっていうふうに思っているんですけれども。

ですから、今までの英語活動の蓄積があるわけですし、幼稚園から小学校3、4年までは先生方でも、今までやってきたわけですから、あまりどうなんだろう、松島の実態は私も見ていな

いんだけれども、しかし実際に授業をやってきたわけですから、そこは大丈夫なのかっていうふうに。底上げというのも大事ですけども。ここの5、6年生をどうするか。

実は、私そのときに、これがそうなんです、これは17年に私、外に一度出て二小にまた戻ってきたものでしたから、この英語活動の調査というのをやったことがあったんです。その英語をやった塩釜二小というところとほかの学校の差はどうかというところ。それで、どういう結果が出たかという、テストの点数は、中学校に行って、この9年から16年まで毎年のように、その後は研究指定校が終わってもやっていたんです、二小は。でも、点数は全然変化はないそうです。これ、全国の調査がそういっています。英語の点数にはかわらない。何がかわるか。瀬野尾先生がさっき言った、物怖じしないっていうんだ、外国人に対する。それから、会話、聞くっていうのに興味をものすごく示している。それだけでも英語活動をやったこなかった時代の子供に対して、中学校はそういう部分はやりやすいですというふうに、中学校の先生方は評価をしているわけです。

ですから、ただ今回は、さっきもありましたように課題があって、それを小学校に前倒して、文字を入れたり、書く、読むというのを。私もどんな文字が入るのかっていうのを、ちょっと私も調べました。そしたら、すごく簡単だということもあるようですけれども、そういうところが今までの英語活動をやってきた、その課題を何とか克服しようと、解決しようというところで今回の英語教育があるんだということをも勉強させていただいたわけですが。

もう一度結論を言うと、やはり英語活動と英語教科化のこれって、別に考えられたらどうなのかな。そうしないと課題に向けて解決していかないのかということを感じているということです。

○内海教育長

ありがとうございます。

瀬野尾先生、お願いします。

○瀬野尾委員

今の件、よろしいでしょうか。

英語活動は大体の学校が担任の先生1人で対応するのではなくて、県とかからALTを派遣されて、年間に何回か派遣されて、大体ALTの先生が入っての活動ですよ。だから、担任だけが学習する英語活動ってあまりされていなかったんじゃないかと思うんです。

それで、佐藤委員が今おっしゃったとおり、子供たちが外国の人に対して物怖じしなくなったという、そこだけでも随分違うと思うんですが、今の活動から学習になったときに、ALTのマーティン先生と私は今組んでやっていますけれども、僕はそこは全くタッチしていなかったんだと、いつも活動として、ゲームとして楽しくじゃんけんをして、あっちだこっちだって移動してやっているので、そこへ例えばアルファベットを、書き方は決まっていなくても一応こういうように書くっていう指導をすると、そのところになると本当に申しわけなさそうに、まったくそこはやっていないんですって話なんです。

それで、教科等を、そこで私は一つの提案は、もうひとつ、ALTの先生をどう使うかっていうのをもう一度、町としての契約はあると思うんですけども、私はもったいないと思うんです。私がいま指導案を作って、この時間の目標はこうですっていうことをマーティン先生に、日本語でもわかると思うんですが、一応英語で全部お知らせするんです。そして、マーティン先生この目標を達成するためにここに何か面白い活動を入れられるっていうと、それな

らこれをやったらどうですかって提案してくれて、それがまた楽しいんです。

ですから、この間、私が計画を立てるから活動はマーティン先生が毎時間考えてくれないかと言ったら、僕の立場でそこまでやる先生はほかでも聞いたことがないというから、そうかと思って。もうちょっと私たちというか非常勤、担任も含めてですけれども、ALTの先生の活動の幅が広がると、先ほど次長の懸念していた、毎時間入らなくてもいいんじゃないかと。今私はDVDを使っているんですが、逆にそのDVDで映像を見せると、ALTの先生に申しわけないと、ここに生の外国人がいるのに何で映像で見せなきゃならないのって思う部分があるんです。

ですから、ALTと組んでやるところと、あとは幼稚園に行っているからICT活用でやったらいいという部分とが、こううまくいくと。だから、そこは契約が必要でしたらそこを含めて、そしてこの間キッズガイドでブライアンさんたちの指導の方法とかいつも見るんですが、とても楽しいんです。子供たちも嬉々としてやっているんです。じゃあ瑞巖寺に行っちゃんと説明できるかというところすごく自信がなくなって声が出てこないんですけども、少なくともそこでやっているときは楽しくできるんです。私がブライアンさんに、私がやるとよくできる子とできない子のやはりどちらも伸ばしたいので、こちらに重心を置くとこちらが退屈するんですけども何かいい方法はあるかと言ったら、それはあなたのトピックスの出し方が下手なんだって言われたら、そうって言うことだったんですが。そのようにいろいろな良さを持っているんだったら、じゃああなた授業をしてみたらどうなんだって私なんか言ってみたくてなるんですが。

そういうように、せっかくALT2人いるので、今後は今の形ではなく、何かもっと任せる部分、中学校も会話を、これは私かつてやっていた方法ですが、4時間のうち3時間はグラマーを中心にして、受験英語みたいな、日本人の先生が中心になるけれども、1時間はもうまったく外国人の先生を中心に会話力をつけるということを組み込んだこともあるので、そういう組み方を松島は今後考えていく必要があるかって思います。

長くなってすみません。

○内海教育長

提案ということで。

○瀬野尾委員

そういう方法も今後考えてほしいです。

ALTの方との契約ってあるんでしょうね、これ以上使えないみたいな。あくまでもアシスタントティーチャー、ランゲージティーチャー。アシスタントだから、そのアシスタント、アシストするのはどこまでかという。だって、カリキュラムを作れまでは言っていないんですから。こちらがちゃんと指導案を作るんですから。このところは考えてくださいみたいにはできない。

○内海教育長

じゃあ、契約の在り方については、契約の在り方っていうよりALTの使い方によって契約を変えていくっていうのが今ちょっとありましたので、ちょっと頭に入れて今後考えていきたいと思います。

○櫻井町長

一つだけちょっと確認したいのは、ALT今2人いるでしょう。行政というのは、ALT2人

入れてやると町は英語が良くなっているんだらうと簡単に思っちゃう。この間ちょっとお話し合いをしたけれども、やはり行政、我々の立場とすれば数字がこう上がってきていますと。例えば試験はやった、点数は毎年上がってきていますと、1点でも2点でも、そういったこともこの間言いましたけれども、ちょっと今気になったのは、ALT2人の方と、それから中学校に担任が、英語の教師3人いますということなんだけれども、その中でこのコミュニケーションの何かはとっているんですか。

○三浦教育次長

中学校の英語の教諭とALTですか。

中学校に関してはブライアン先生が中学校の職員室に机がありますので、常にそこでじゃあ明日の授業をどうするかとかっていうコミュニケーションは図っております。

○櫻井町長

それがブライアン先生、マーティン先生、全てのグループトークングみたくして、どうしていったらいいんだらうかというのはやはりやる必要があるのではないかと思います。

幼稚園は、例えば英語というのは遊びから入るということで多分入ったんだと思うんです。だから、そういうことで、遊びだとテレビの影響で、グループでワーワーやるやつはみんな私と同じように発音が悪いんです。正確でなくても多分そこに参加できるんだらうと思うんだけど、一人一人じゃあ今度読書をしなさいといわれるとやれないという、多分そこに問題があるんだと。そこで今度教育が入るんだらうという。

ブライアンというかALTの、私は契約内容もちょっと確認していないんだけど、その辺も今度次長ちょっと確認しておいてください。

○三浦教育次長

先日七ヶ浜に松島から転勤した先生とちょっと話す機会があって、七ヶ浜で英語の授業って、ちょうど高学年の担任だったものですから。そしたら七ヶ浜の場合はALTがT1になっていますと。担任が逆に補助になっているんですということで、そういうやり方もあるんだと。つまり、それはそういう契約の仕方だと思うんです。

うちの町の場合には、あくまで教諭が授業、これは立てたもの、あるいは県の非常勤講師が立てたものに基づいて助手をしてもらうということで勤務していただいているということです。

○瀬野尾委員

質問していいですか。

T1をやってはいけなくなっているんですか。

○三浦教育次長

それはまず特区というところが大きいんだと思います、七ヶ浜の場合は。

○瀬野尾委員

そうですか。

○佐藤委員

契約するときに2つありますよね、ALTの契約するときに、どことどこでしたっけ。ジェットプログラムともう一つは、県から。

○三浦教育次長

あとはインタラックという派遣会社を使っている自治体だったんです。

○佐藤委員

その派遣会社を使っているところで、ALTそのものが主導でやるんです。そうしないと何かだめなような。ですから担任が、あまり力量が伸びないんです。担任のほうはT2になっているので、助手みたいな。だから、その派遣の仕方によってそこが違ってくるのかっていうふうに、利府はそうですよね。ですから、先生方はあまり力量が伸びない、T2なもので、ほとんど。

○瀬野尾委員

それはT1になったりT2になったり、その場面に応じて交代しているんじゃない、常にT2なんですか。

○佐藤委員

何か、任せてくださいという契約だそうです。

○瀬野尾委員

じゃあ、カリキュラムも全部組むんだ。

○佐藤委員

いや、カリキュラムまで、こういうふうなことをというの言うんだろうと思いますけれども。とにかくT1になる。

私も、あとそれでは先生がいつでも脇のほうにいるものですから、担任の先生が、どうなんだろうって、私はそういう授業をあまり見たことがなかったの。

○内海教育長

教員免許を持っていない者が教壇に立てるんですか。

○佐藤委員

そこはわからないです。どういうふうに契約されているのか。

○三浦教育次長

多分、いわゆるALTの先生をT1にするかしないかというのは、いわゆる、例えば評価者最後の、例えば英語の外国語化になったときに、評価まで任せるのかという、そこがあったんだと思います。多分そこは現状の学校教育法の児童の指導を司るという教諭の役目からすると、そこまでは多分ALTには任せられないんだろうと思います。この授業を進めるリーダーシップをとってもらうという意味では可能なんだとは思いますが、最終的には教諭あるいは県からの講師が評価の責任を持たなければならないと思います。

○内海教育長

瀬野尾先生。

○瀬野尾委員

評価の件でもう一つ、学校評価の中で、例えば英語が好きですかとか、そういう単純な、英語の時間が好きですかというようなアンケートをそういえばうちで見たことがあったけど思ったりしたんですが、英語の時間が嫌いなんてなると、何かやはりそこから、私なんかも常に子供がつまらなくなると私のやり方が悪いなんて反省するんですが、そういうのもやはり意識としてこれから考えていったり、またはそのALTの話になりますが、お金を何か使わせて町のほうには申しわけないんですが、例えば英検2級を、去年よりも10%取得者を上げたり、15%上げたら特別報酬を出すとか、そういう契約をしたりして、結構その数値的なものでしたら、そういうのとかいうのも一つの契約の仕方としてあるのかとか、そんなことを思いながら日々過ごしております。

○内海教育長

ありがとうございます。

A L Tをどう使うかということで、契約の仕方もあるし、佐藤委員がお話したように、A L Tが主になってやると教員が伸びないというようなご意見もいただいたし、契約の中に主になる、後ろに回るということが書いてあればどっちでもいいわけですね。そういうようなことが可能なかどうか、今町長のほうからも質疑がありましたので、次長とかあと教育委員会で調べてみて対応していきたいと思います。

それから、A L Tの中に数的な目標を入れて契約というようなご意見もいただきました。これも可能なかどうか吟味しながら、他市町村のほうも見ながらちょっとやっていきたいと思っています。

町長のほうで、あと何かお聞きしたいようなことはございますか。

○櫻井町長

先生方の端々に、32年度に向けてA L T以外のことの必要の先生方はどうするんですかという、何か今日はもらったということで、それは行政側として考えなければいけないんだと。それが、その言葉が補助教員なのか何なのかは別として、やはり考えていかななくてはならないのかというふうには思います。

ただ、やはり現状、もう一回ゼロベースに戻して、もう一回原点に戻って、今どうなんだろうかと確認してからのほうが、来年、再来年に向けての行政としての予算の組み方になるのかというふうには思います。

○内海教育長

瀬野尾先生。

○瀬野尾委員

今ほとんど授業についての話だったんですが、特に中学校で感じますのは、今ここで学力をばんと上げるということは、何かとても難しいんです。英語ってどうしても日々の勤勉な学習がないと単語を覚えられないと、全然話すことにつながっていかないし、目標を持たないと何かこう、どうしてもいやいややっている感じなんです。

そういう意味では、先ほどのシャワー、サマーキャンプシャワーですか、何かこう楽しく、ペンパルでもいいんですが、何かこうつながることによって面白いと思うものの仕掛けを小学校のうちにやっておくことが、中学校へ興味を持っていく一つのきっかけかもしれないということを感じますので。

もしここに、ご提案の一つの一例としてサマーキャンプの取り組みとかもあります、もしそういうことが実現しそうないいことじゃないかと思っています。

○内海教育長

ありがとうございます。

どうぞ。

○櫻井町長

関連して、一つだけ。

実は今年、子供英語ガイド、何人来るだろうかということで産業観光課の職員と心配していたんです。去年実は子供英語ガイドを募集したところ、定員に達しなかったんです。何とか頼んで1名減ぐらいだったんです。今年は、そういう心配をしていたんだけど、オーバーで

来たということで、良かったということで、オーバーということは、何かそういう楽しみがあってまた行こうということで、友達を誘ったり何だりして来てくれたんだろうと思うんです。

だから、これが例えば来年、今よりも、今年よりもまた来年増えてもらえればそれはそれでいいと思うし、そういった何かのきっかけで子供たちが英語に特化する、かかわっていけるように、そちらはそちらでまた必要なのかというふうには思っていますので、よろしく願います。

○内海教育長

英語漬けキャンプなんですけれども、それ単独で、瀬野尾先生がおっしゃったように仕掛けをして楽しくなるようにしながらも、人のふんどしで相撲を取るわけではございませんが、そのまま英語キッズガイド辺りに向かえるとか、そういうようなことも実は考えておりました。単独で孤立させないようにして、ほかの課ですけれども、ご協力いただきながらうまくリンクできて、町長がおっしゃるように英語が楽しいと、中学校に行っても面白いと、やろうという感じになるようにしていきたいというのは、教育委員会で考えているところでございます。

ほかにございませんか。

○佐藤委員

最後に、私は英語教育が楽しい町へというこのフレーズ、その中の4番目の、松島町の願いとしてはというふうに書いてありますが、私本当に松島は、日本の中でもやはりブランドの高い町なんだということをつくづく感じているわけでございます。特に観光の町ですので、外国人がいっぱい来る。先ほどは中国の方も多いうふうには、中国語もどうだという話も出ていますが、それも含めて。

実は、私もさっき英語をやったというふうにお話しましたが、この子供たちはやはり学校では勉強するんだけれども、その実践の場というんですか、そういう場所がないんです。塩釜というのは外国人、通過点なものですから、松島のようにいっぱいいいない。そうすると、やはり松島っていうのは、観光ガイドなんて子は、先ほど町長からありましたけれども、その実践の場としての、観光客とネイティブな発音が、会話ができる町、そうすると力がついていくのかという意味で、ぜひ松島だからこそ、この英語教育を何とか充実していただきたいという思いがあります。

私、大学時代に、先輩が将来は英語で仕事をしたいんだというので、いつでもイヤホンを使って英語を聞いていました。じゃあ、力をつけるためにどうするか、実は俺松島に毎週、当時土曜日仕事まだある日でしたから、日曜日に観光客がいるので、外国の方と、実践の場として松島に言ってしゃべってくるんだ、それが実は力がつくんだという話をされていたことを、今もずっと心に残っているんです。じゃあお前がやったかという、俺はやらなかったんだけど。

そういう意味での、松島の英語教育が楽しい町づくりというのは、ぜひ進めていただきたい。私も楽しみにしたいと思って、期待をしたいというふうには思っています。

○内海教育長

じゃあ、時間がまだあるんですけれども、一応こちらへんで締めていきたいと思いますが、よろしいですか。（「はい」の声あり）

確認します。今この会議でお話があったことはグローバル化と、これかなり意識してほしいと。あと戦略的なこと、あるいはロードマップ、これは瀬野尾先生がおっしゃったように、

指導書のカリキュラムのシラバスと同じものだと思いますので、そこら辺を意識して、あと英語の専科制、人事的なものということ。それから、学校は面白いものをしたときには楽しい仕掛けをいっぱい盛り込んでほしいと。それから、ALTの契約のあり方についてとか、細かいのも含めるとたくさんご指摘をいただきました。こういうのを基にしながら、あと町長のほうからは人的なことについてのお話がありましたので、それも記録に残させていただきますけれども、そういうことも踏まえながら、今後の英語教育の在り方について、教育委員会、あと教育委員あるいは町長を含めて考えていきたいと思えます。

以上で、ここら辺で議長を降りさせていただいてよろしいですか。（「はい」の声あり）はい。

○櫻井班長

ありがとうございました。

今出た指摘事項というか、それは次回もし可能であれば、結果を踏まえてそちらのほうも話をさせていただいて、なおかつプラスして総合教育会議の場で議題として上げられる部分があれば上げるということにしたいと思えます。

次回、一応12月ごろまでには第2回目をやりたいということなんですが、予算の関係もありますので、できれば10月、11月あたりで第2回ができれば、先ほど町長が言ったように人的な配置というか、あると思えますので、そこで開催させていただきたいと思えます。

4. 閉会

○櫻井班長

それでは、以上を持ちまして開議の一切を終了いたします。

本日はありがとうございました。

この会議録の作成者は、次のとおりである。

平成30年8月6日

松島町総務課総務管理班 主査 大久保 哲也